



教科書諸問題

すずき ようこ
鈴木 庸子 ●イタリア語通訳・翻訳家

イタリアでは現在、6～16歳までの10年間が通学義務期間と定められている¹。このうち、公立の小学校（5年）と前期中等学校（中学に相当。3年）での教育が無償で保証されている点は、日本とも共通している。ただし、小学校では無償の教科書が前期中等学校では有料となり、その調達各自に任される点では、大きく異なる。

娘が後者に上がった昨年秋、私はその差の意味を体感した。

前期中等学校の教科書準備は、各校のサイトから所属クラスの指定書リストをダウンロードすることに始まる。教科書は実際に教鞭をとる先生が各自指定するため、同じ学年でも組毎にこのリストは異なる。新入生の組編成は入学式前日に発表されたため、教科書手配は必然的に授業開始後となった。これは特殊なクラスを除く学年全員に共通した条件であり、また本なしでの授業開始は小学校も同じだったので、焦りはなかった。学校からも、調達期限等の言及はなかった。

全14冊のリストを印刷した私は、ナポリ旧市街の本屋街²に向かった。この時期は、各書店の外まで、スポーツバッグやイケアのキャリーバックを抱えた父兄が行列をなしている。9月半ば過ぎ、海がぴったりの週末。本屋街の全店を約4時間かけて踏破したこの日は、4教科の教師用教科書（20%引き）を入手して終了した。残りは、オンライン注文（ただし指定店舗での引き取り）で15%引きをしている生協に一括注文する³。

これで一件落着、と思いきや。

まず、リストには本の掲載がなかった美術の先生から「今年の教科書は〇×」との通達が入る。305ユーロだった定価総額は、一瞬で330ユーロとなった。仕方あるまい。生協に追加注文する。

さらに、注文分が店舗に揃った段階で生協から入るはずの携帯への連絡が、梨のつぶて。注文10日後に追跡をかけると、全て「出版社に注文済み」との回答。2週間後、「出版社から発送済み」が漸く1冊と言う惨状に、注文し直しも考えて近所の書店へ出向く。

「頼んだら、いつ頃来ます？」

「出版社の在庫次第なので…」

本屋では割引もない。注文し直しも思いとどまる。

本抜きでの授業は気になるが、皆似た様なものだろうと踏んでいたある日。クラスの教科書準備状況を娘にたずねると、全教科揃えた子も出始めているというではないか。年上で同じ組（先生は組毎の縦割りで、1年A組担任は2年A組、3年A組も担当）の兄弟や親戚を持つ級友たちが、お古を譲り受けたのだ⁴。そろそろ、どうにかせねば。

注文の追跡確認が苦痛になり始めた、10月半ば。「来週より教科書持参前提で授業」の連絡が、複数の先生から入る。生協の追跡結果は、「出版社から発送済み」2冊。私は本屋街に戻り、あったものは全て購入した。新品のみだったのは懐に痛かったが、背に腹は代えられない。生協への注文は、出版社から発送前であれば無償で取り消せるので、この日購入分をキャンセルする。週明けから前提条件とされた本をこの日確保できたのは幸

いであったが、保健体育、技術、芸術、物語が、無い。が、無いものは、無い。この4冊は、心静かに知らせを待つのみと、腹をくくる。

数日後。技術の先生から、「教科書△□を早急に準備せよ。サイト掲載分は間違い」との連絡が流れてきた。慌てて生協のサイトで追跡すると、1ヶ月前に注文した「間違い」は、まだ出版社から未発送。即座に取り消す。遅延のお陰で間に合った、か。

この期に及んでの教科書変更は納得し難いが、この頃の私はもう、一刻も早く本探しから足を洗いたい、その一念である。翌日用事を足す足で、例の本屋街にだめもとで寄ってみた。

「中古なら、ありますよ」

2軒目の店主の言葉に、耳を疑った。

ビニールに包まれた新品はチェックできないが、古本は状態の確認が必須である。表紙をめくると、青マジックで書かれた名前と、それを囲む見開き一杯のいたずら書きが目飛び込んできた。これは使えないな、と思いつつもめくって行く。なんと中身はまっさらで、書き込みはゼロ。

「後で売るんだから、汚すんじゃないぞ！」

元の持ち主の父兄の声が、聞こえた気がした。

定価の半額を払い、10月後半にまだ教科書を探している経緯を店主に漏らすと、

「始業式から1ヶ月もしてから、30ユーロの本は『間違った』？そんな時は、クラスの父兄ががん首揃えて校長に即刻直談判！学校の公式情報に則って皆購入済みだから、この本で授業しろって」

と一喝された。ごもつとも。来年からはそうしよ

う。

10月末。3冊が揃った旨、生協から連絡が来た。ここに、1ヶ月半に渡る今年度の我が教科書探しは終了した。その領収書、総計270ユーロ(約34,000円)。割引に拘った結果定価の2割弱を抑えられたが、それでもこの額である。しかも、税金控除対象外と来た⁵。

義務教育用教科書を揃えることに何ら疑問を抱かず、当然のことと財布を開いたのだが、どこか腑に落ちない。

12月半ば。女子会から帰った娘が、

「Aちゃんがね、『Bちゃん、教科書揃えないでさ、毎日宿題のページ写メしてってメッセージ送ってくるの。うざい～！バレエ教室掛け持ちするお金はあるくせに』って言った」

と、ガールズトークのお裾分けをくれた。

Bちゃんの親を糾弾するのは容易である。だが、300ユーロ超と言う金額に焦点を合わせたとき、勉強には全く興味がないが、例えばダンサーとして優れた素質に恵まれた子を持つ親が、義務教育の中でも授業と教科書を個別に捉え、無償の前者は(宿題を含め)履修するが、有償の后者の調達よりバレエのレッスンを優先するという選択肢を見出すことに、矛盾や過ちはあるだろうか。

今年の娘の教科書の総重量は、23kg。スカスカのリュックで足取りも軽やかなBちゃんと、二宮金次郎のような姿勢で通学する同級生たち。Chi va piano, va sano e va lontano - ゆっくり進む者は、無事に遠くまで行き着く - という諺を思い出したりしている私は、教科書の様々な重みを、まだ消化し切れていない。

註

1. https://archivio.pubblica.istruzione.it/news/2007/allegati/obbligo_istruzione07.pdf
2. 本屋街は半分以上が古本屋だが、新書のみ扱う本屋、新書も扱う古本屋も通りに並んでいる。ナポリ大学、オリエンターレ大学など、昔からの大学がある地域にあり、学生、教員にとって欠かせない街だった。最近インターネットの普及とともに閉店に追い込まれる店も出てきており、喫茶店、ミニスーパーなど本屋以外もできている。
3. アマゾンも、クーポンや15%引き等教科書対象キャンペーンをしていたが、我々にはいずれも期限が早すぎた。
4. 3年分が一冊にまとまった教科(音楽等)や、去年とは異なる教本、または最新版を指定する先生もいるので、彼らですら全く購入せずに済んだ訳ではない。
5. 低所得者層に対し、教育・大学・研究省から教科書購入補助金が出ている。これによって、例えば我が町の前期中等学校の場合、A校では学校側が揃えた全教科書が、B校では教科書購入用カードが、対象学生に渡される。基本的に教科書は貸与扱いで、進級の際学校への返還が求められる。なお、教科書やカードが対象者に届いたのは、去年の場合11月であった。